

ユネスコの世界無形遺産に指定。 日本の誇るべき大切な芸能。

鑑賞とともに、謡や仕舞のお稽古ごとの面でも、
誰でも楽しめる芸能として親しまれています。

千年以上前から歴史と共に 歩んできた日本が誇る伝統芸能。

能の起源は、千数百年以上もの昔、古代の日本に、遠くアジアの西域からシルクロードを経て伝来した、散楽（さんがく）という芸能にさかのぼります。散楽は、滑稽な物まねや寸劇、曲芸、奇術、軽業、幻術などの大衆芸能で、奈良時代には、宮中の散楽戸（さんがくこ）という組織で保護されました。その後、散楽戸は廃止され、徐々に民衆の中へ、日本各地へ広がります。

平安時代になると、散楽と土着の芸能が融合した多彩な芸能が生まれます。その一つが猿楽で、この猿楽こそが、能楽の直接の母体です。さて、この頃には、農耕行事から発生した田楽という芸能も盛んに行われていました。猿楽や田楽では歌舞の劇として「能」を演じるようになり、それぞれ、猿楽の能、田楽の能と呼ばれました。そしてこれらの芸を行う役者集団の「座（ざ）」が各地で活動するようになります。座は寺社に所属し、法会（ほうえ）、祭礼等で集まった人々に芸を披露しました。



室町時代、現代能の流儀の源として、 大和猿楽四座が人気を博す

猿楽の能が大きな発展を遂げたのは、南北朝から室町時代の頃です。都では当初、抽象的な舞を主体とした田楽が人気でしたが、そのうち芸術的な洗練がなされた猿楽の座が台頭します。特に、大和国（奈良県）を本拠とする大和猿楽四座が、都で人気を得て、室町幕府の庇護を背景に、勢力を伸ばしました。大和猿楽四座は今の能楽の各流儀の源です。外山（とび）座が宝生流に、結崎（ゆうざき）座が観世流に、坂戸（さかと／さかど）座が金剛流に、円満井（えんまんい／えまい）座が金春流に、それぞれ受け継がれています。



大和猿楽四座のうち、結崎座の観阿弥は、物まね芸主体の猿楽に、中世の流行曲の曲（クセ）舞などを取り入れ、能の演劇性を高めました。さらに観阿弥の子、世阿弥は、より洗練された芸を追求し、夢幻能の仕組みを確立して、能の芸術的な進化を導きました。こうして猿楽の能は、現在に通じる仮面劇・歌舞劇の総合芸術として、大成されました。

世阿弥以降、一時的な衰退もありましたが、猿楽の能はその後、武士に広まり、繁栄します。特に豊臣秀吉は能を好み、自らも盛んに舞い、大いに支援しました。後の徳川幕府も能に熱心で、幕府の式楽と定めて後援しました。能役者は幕府や各藩に仕え、儀式での演能や武家の稽古に携わりました。この江戸時代には、喜多流も成立しました。

明治維新により、能は衰亡の危機を迎えます。いくつかの流儀は断絶しますが、財閥や華族の後援を得て盛り返し、より大衆的な芸能として発展します。この明治時代に能と狂言は、猿楽から「能楽」と呼ばれるようになり、現在に至る基盤が作られました。こうして能楽は、鑑賞とともに、謡や仕舞のお稽古ごとの面でも、誰でも楽しめる芸能として裾野を広げてきました。日本の誇るべき大切な芸能であり、世界の評価も高く、ユネスコの世界無形遺産に指定されています。